

鬼桃太郎

尾崎紅葉

青空文庫

むかしぢゞく翁やまは山へ柴刈しばかりに、
 媼ばゞは洗濯せんたくの河かはにて、拾ひろ

ひし桃實もゝの裏うちより

生うまれ出いでたる桃太郎もゝたらう、

猿さる雉き子じいぬ犬いんぞつを引率いんそつして

この鬼おに个がしま島しまに攻せめ來きたり、

累世よゝの珍寶たからを分ぶん

捕どりなし、勝かち矜ほこらせて

還かへせし事こと、この島末しままつ

奔 幽 超 回 舞 夜 東 母
看 知 興 結 舞 夕 夕 夕
舞 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕
夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕

Handwritten signature or text

Handwritten signature or text

我^{われ}功^{こう}名^{みやう} 名^な せむと想^{おも}はざるはな

けれども、いづれも桃^も太^た郎^{らう}

が技^て※^{なみ}に懲^こり、我^{われ}はと名^な乗^{のり}出^い

づるものもあらざりけり、

茲^{こゝ}に阿^あ修^{しゆ}羅^{らか}河^{かは}の畔^{ほとり}に

世^よを忍^{しの}びて、侘^{わび}しく住^す

みなせる夫^{ふう}婦^ふの鬼^{おに}あり

けり、

もとは鬼^{おに}个^が

島^{しま}の城^{じやう}門^{もん}の

まもりつかさ

衛^{ゑい}司^しにてあ



りけるが、桃も

太郎攻入たらうせめいりの

御敢みぎあへなくも

鐵てつの門扉とびらを打うち摧くだかれ、敵軍てきぐん

乱入らんに入に及びおよし條でう、其身そのみの懈怠おこたりに因よるものなり

とて、斜ななめならず王鬼わうおにの勘氣かんきを蒙かうり、官くわんを剥はがれ世よに疎うとまれ、

今いまは漁人ぎよじんとなつて餘命よめいを送おくるといへども、何日いつかは身みの罪つみを償あがなう

て再ふたゝび

世よに出いでむことを念懸こころがけ、

子鬼こおに

の

鬼桃太郎

むつし、翁を山へ柴刈に
 媪と洗濯の河よて拾

ひし桃實の鬼より

主と出でたる桃太郎

猿雉子犬を引率して

この鬼ヶ島よ攻來り、

累世の珍寶を分

捕ふし勝誇らせて



還せし事と此島來

代まぐは耻辱あり

あそれ願くは武勇

勝とさる鬼のあれう

其力を藉てかりとも此

遺恨齎さくやと時の王鬼

島中よ禍を下し誰よても

あれ日本を征伐し桃太郎奴が

若衆首と分捕らまざる珍寶

を虜へ還つむものく此島の



角つのの束つかの間まも忘わするゝ間ひまぞなかりける、さるほこのふれどに此こ觸ふれを聞きく嬉うれしき、茨木いばらき童子どうじが斷きり落おとされし我わが片腕かたうでをも見みたらむ心地こゝちして、此このとき時ときなりと心こゝろばかりは逸はやれども、嚮さきに城じやうもん門もんの敗戦やぶれに桃太郎もくたらうと亘合わたりあはせ、五十貫目ごじつくわんめの鐵棒てつのぼうもて、右みぎの角つのを根元ねもとより摧折ひしをられたる創きずの今いまに疼いたむこと頻しきりにして、

王とふすべしとありけき血氣と遊る
若鬼成ひしと額の角を蠢し

我功名せむと想えさるるか

けきともいづれも桃太郎

ケ技倆は儼り我と名乗出

づるものあらさうけで

茲に阿修羅河の畔

世を忍びて能く住

みふせる夫婦の鬼あり

けで

まどく鬼

鳥の城門片

衛司よてあ

りけるが桃

太郎攻入の

砌敢ふくも

鐵の門扉を打摧うれ敵軍

乱入に及びし餘其身の懈怠よ因るものあり

とて斜らに王鬼の勘氣を蒙り官を剥かれ世に疎れ

今て漁人となつて餘命を送るといへとも何日は身の罪を償うべし再び



ふぢやまひえ 不治の疾を得たりければ、合戦な

むど思ひも寄らず、かゝる時子だ

にあらばと頻りに妻なる鬼を罵りぬ、

されば妻の言ひけるは、傳聞く日本の

桃太郎は、河に流れし桃より生れて武

勇拔群の小兒なり、尋常なる鬼胎より出で

なむ鬼兒にては、彼奴が敵手とならむこと

覺束なし、妾夜叉神に一命を奉げて、桃太郎

一倍なる武勇の子を禱るべしと、阿修羅河

の岸なる夜叉神社に參籠し、三七日の夜に

して始めて靈夢を蒙り、その拂曉水際に立

世に出でしことを念懸け
子鬼

の角

此東の間も

忘る、間をかくりけるさる

目と此觸を聞く嬉しさ茨木

童子が脱落され、我片腕をも見よ

らむ心地にて、此時ありと心はうりこ

逸まとも、鶴と城門の

敗戦、桃太郎と巨合

くせ、五十貫目の鐵棒もて

右の角を根元より摧折れよ

る創の今よ疾むこと頻りよして

不治の疾を得さうけとて合戦か

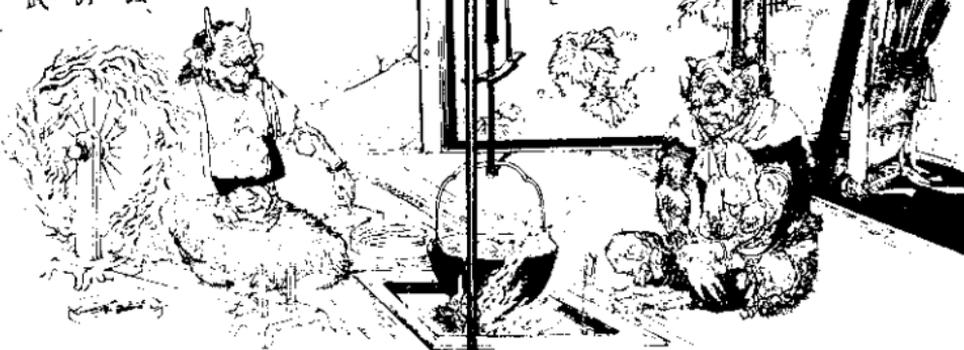
むと思ひも寄らば、ぐる時子よ

よあらんと頻りよ妻ふる鬼を罵りぬ

されと妻共言ひける、傳聞く日本の

桃太郎、河は流さし桃より生れて武

勇哉群れ小兒なり、尋常ふる鬼胎より出で



いで、見れば、いと

大きな苦桃おほにがもゝひと一

顆浮波々々と浮来りぬ、扱はと嬉しく

抱いだきかへ還れば、待構へたる夫の喜悦たと

ふる方なし、

割きて見れば果せるかな、核お

のづから飛で坐上に躍ると見

えしが、忽焉其長一丈五

尺の青鬼と變じ、紅皿の

ごとき口を開き、爛々た

る火※を吐て轟と立た



夫も鬼兒よてく波奴敵手とからむこと
 覺束あゝ妾後又神よ一命を奉けて桃太郎
 二倍ある武勇の子を禱るべしと阿修羅河
 の岸ある夜又神社に參籠し三七日の夜よ
 して始めて靈夢を蒙りその拂曉水際より立
 出で見れんいと

大きかる苦桃

頼浮波々々と浮來りぬ扱くと擣
 抱選れを待構へる夫の喜悅とと
 ふる分あり



割きて見まて果せるりな核ふ
 のづから飛で坐上に躍ると見
 えいぞ忽焉其長一丈五
 尺の青鬼と愛し紅血吐
 ごとき口を開き爛々さ
 る火筋を吐て轟と正さ
 る其風情鬼の眼よさへ
 恐ろしくもまゝ物凄くぞ見えさりける



苦桃の裏より生まれよむとて苦桃太郎
 と名乗らせぬ扱大姉所志よを語りけま

る其風情、鬼の眼にさへ

恐ろしくも、また物凄くぞ見えたりける、

苦桃の裏より生まれればとて苦桃太郎

と名乗らせぬ、扱夫婦所志よしを語りけれ

ば苦桃大いに喜び、易き事かな、我一跨に日本へ推渡り、

三指にて桃太が

そつ首引抜き、其國の珍寶の有らむ限り引攫うて還るべし、

これより出陣くと勇み立てば、夫婦

のいふやう、此條王鬼に

届出でずして我儘に出立せば、或ひは功

も功とならずして、却て咎のあらむも

と苦桃大いよ落ひ易き事うな我一跨に日本へ推渡りて指よて桃大か

そつ首引抜き其國に珍寶の有らむ限り引掣うて還るべし

これより出陣くと勇み立てて夫婦

のいふやう此條王鬼よ



届出ですして我儘よ出立せむ或はし功

も功とあらすして却て咎のあらむり

刺り難し夫知る罪を負ふ身の

持満愜るされことと苦桃太郎

單身して王城に到らしめ桃太郎

征伐の義を言上しけまむ王鬼火焔

を吐きて悦ぶと限りなく八角に削成

して二百八十八箇の銀星打さる鐵棒を



賜ひ爾之を以て桃奴を腰背微塵に碎けよとありけきて

苦桃太郎冷笑ひ桃太郎風情の小童十人二十人風を拈るよりか不易きに

測り難し、夫婦は罪を負ふ身の

拜謁 愜はざればとて、苦桃太郎

單身して 王城に到らしめ、桃太郎

征伐の義を言上しければ、王鬼火※

を吐きて悦ぶこと限りなく、八角に削成

して二百八十八箇の銀星打たる鐵棒を

賜ひ、爾之を以て桃奴が腰骨微塵に碎けよとありければ、

苦桃太郎冷笑ひ、桃太郎風情の小童十人二十人、虱を拵る

よりなほ易きに、

安ぞ武器などの入り候べき、

假初にもかゝる物を賜ふ

事こと頗ごる某がが武勇ふゆうを氣遣きづか

ひたまふに似にたり、無礼ぶれい

は御免おんゆるし候へ、これ御覽ごらんぜ

よ方かた々々／＼と、側そばなる鐵てつの圓まる柱ばしら

を小指こゆびもてゆらくくと盪おしうご搖ごか

せば、滿座まんざ齊ひとしく色いろを失うしなひ、やれ

苦にが桃もも技て※は見みえたり、止やめよくと

震慄おのきけり、

王わう鬼おに近ちかく苦にが桃ももを

招まねきて、かかなんぢる爾

が武勇ふゆうを以もつて

せば、桃太郎もくたらう

を滅ぼさむほろ

事疑ひなし、別べつ

に取らすべきものありと、

自家穿ぎみつからは

たりし白びやく

虎の生皮もこいきがは

て造れる禪を解きてつくはかまと

投出したまなげだ

へば取て戴きとついたぐ

双の角に引懸けそうつのひきか

安そ武器ふごの入り候へき

假初はもかゝる物を賜ふ

事頗る某が武勇を氣遣

いさふふま似たり、無礼

を御免し候へこれ御覽せ

よち々と側なる鐵の圓柱

を小指もてゆらくと濺揺ら

せは満座齊しく色を失ひやれ

苦桃枝柄て見えたり止めよくと

震慄さけり



王鬼近く苦桃を

招きてかゝる爾

が武勇を以て

せむ桃太郎

を滅ぼさむ

事疑ひあし明

は取らすべきものありと



てふりあしべうし
手振足拍子

をかしげだうまひ
可笑く外道舞

といふを舞ひ、喜び
まよろこ

いさまかんで
勇むで退出けり、

あした
明日ともなりぬれ

わうじやう
ば王城より使者向

はりがねふくろにん
ひて、鐵線の囊に人

げんされかうべ
間の髑髏の附焼十

をもち
筒を盛りて、かの桃

たらうきびだんごなぞら
太郎が黍團子に擬

これひやうらう
へ、之を兵糧にとて

自家穿き

さうりー白

虎の生皮も

て造れる 罨を解き

投出したま

へを取て戴き

双の角より懸け

手振足拍子

可笑く外道舞

といふを舞ひ喜ひ



勇じて退出けり

明日ともありぬま

で王城より使者向

ひて鐵線の糞に人

間の襦袢比附焼十

角を盛りてかの桃

太郎が黍團子よ擬

へ之を兵糧よとて

賜りぬ

祖々て鬼ヶ島の塚



賜^{たま}はりぬ、

徂^{ゆき}々々て鬼^{おに}ヶ島^{がしま}の塚^{さかひ}

に來^{きた}りたる頃^{ころ}、魔^ま風^ふ遽^{はか}に颯^{さつ}々々^と吹^ふ荒^{きす}

み、瀑^{たき}のごとくに暴^{ばう}雨^{うそ}沃^{てん}ぎて地^ち鳴^{ちめい}

動^{どう}し、坤^{こん}軸^{ちく}も折^をるゝかと思^{おも}ふばかりなり、

あ^こら心^{ちよ}地^あ好^りき光^{あり}景^{さま}やと、少^{しば}

時^し立^{たち}留^{とど}つて四^し方^{はう}を屹^{きつ}と見^みてあ

れば、魔^ま王^{わう}嶽^がの絶^{ぜつ}頂^{てう}に當^{あた}りて、電^{でん}

光^{くわう}の閃^{ひら}めうち^{めうち}に金^{こん}色^{じき}の毒^{どく}龍^{りよう}現^{あら}

はれ、此^こ方^{なた}を懸^めけて箭^やを

射^いるごとく飛^{とび}來^{きた}る、やあ小^こ

賢さかしき長なが虫むしの通つう力りき立だて、寄よらば目めに物もの

見みせむと刀ちから足あし踏ふみ鳴なら

して身みがま構まふる間まに、かの毒どく龍り舞まひ

下さがりて太たらう郎まへが前とぐらまに蜷く屈く

こと十まき三した卷は、舌はを吐くき首び

を俛たれていふやうは、某それがしは

魔ま王わう嶽がたけの絶いたゞき頂みづうみなる湖みづうみ水みに

歳とし久ひさしく棲すめる龍りやう王わうなるが、

日に本っぽんの地ちに罷まかり在ある眷けん族ぞくの蛇へび類ども、かの

桃も太たらう郎かしんが家か臣しんなる雉き子じの一いち類ちるゐの爲ため

に、食はまるゝこと年ねん々くその数かずを知しらず、

いかにもして此遺恨報へさこのつらみか

ばやと思ふ事久しけれど、孤おも ことひさ

獨の力及び難く、無念を吞で瞋恚とりちかおよ なた むねん のむ しんい

の炎を吐く折から、將軍此度桃太ほむら は をり しやうぐん このたびも した

郎征伐のよしを聞及び、願はくはらうせいばつ き、およ ねが

御手に隨從して微力を竭し、おんて ずるじゆう びりよく つく

御威勢を以て一族の積る恨ごゐせい もつ いちぞく つも うら

みを散ぜんとして、これまでさん

御出迎ひ仕つりぬ、あはれおんでむか つかま

御從軍御許あらば、身の面目之に過じとありければ、おんとも おんゆるし めんぼくこれ すき

苦桃太郎喜悦淺からず、腰なる髑髏一個取らにがも たらきえつあき こし どくろひとつと

雲よりさる増廣風塵は颯々と吹荒
 み瀑れごとくに暴雨沃きて大地鳴
 動し坤軸も打るゝりと想ふはくりなり
 あら心地好き光景やと少
 時立留つて四つを屹と見てあ
 れて魔王獄其絶頂に當りて電
 光の閃く裏に金色の毒龍現
 る此方を目撃して箭を
 射るごとく飛來るやあ小
 賢い長虫の通力立寄



らで目よ物

見せむと刀足踏鳴り

く身構ふる間よの毒龍舞

下りて太郎の前は蟻屋

こと十三卷舌を吐き首

を俛れていふやうて某は

魔王獄其絶頂から湖水に

歳久しく棲める龍王なるを

日本の地は罷在る春族は蛇類

桃太郎の家臣から雄子の類は乃

は食まるゝこと年々の数を知らず



せて主しゆうじう従ちきりの契約ちきりを結びぬ、

爾時そのとき毒龍どくりようのいひけるは、
往時いんじも桃太た

郎らうは雉子きじさるぬ猿犬さんらうだうの三郎さんらうだう党したを従したがが

へて、大勝利たいしやうりを得えし例ためしに倣ならひ、

將軍しやうぐんも亦また好郎よきらう党だうを召めしたま

はずや、某それがしが無二むにの交まじを結はりむす

べる二頭にひきの勇者つはものあり、も

し御意ぎよいあらば立たち所どころに

召寄めしよすべしとの推すめる

擧きよに、千羊せんやうの皮かは

は一狐腋いつこのえきに

いふもこと此道は恨
はやと思ふ事久しけまど狐
獨の力及び難く無念をむて腹患
の英銀を吐く折々、將軍此度桃太

郎征伐のよきを聞及ひ願ふくは

御手ふ隨従して微力を竭し

御威勢を以て一族の積る恨

を散せんとてこれまで

御出迎ひ仕つりぬ、あまれ

御從軍御許あらむ身は面目之工過しとまりりま

苦桃太郎喜悅淺からば腰ふる獨體一個取ら

せく上従の契約を結びぬ

爾時竜井いひひろて往時桃太

郎と獅子猿犬共三郎党を従々

へて大勝利を得し例も依ひ

將軍も亦好郎党を召さま

えずや果々無二の交を結

べる二頭の勇者ありも

御意あらむ直所

召寄すべしとの推



如しかずの本ほん

文もん、なまじひ

なる

やからかへつあして
輩はいは却かへて足手あしで

ままととひ
纏まとなれど、御身おんみが信しんじて一いつ

方はうの大たい將しやうともなすべき器き

りやう
量りやうありと

せば、早さう々く

その者ものを召寄めしよせた

まへといふ、恐多おそねほき

申まうしぶん分ぶんには候さふらへども、類るゐ

は友を以て聚まる

とも もつ あつ

の喩、其不肖とい

たとそれがむせう

へども魔王嶽

まわうがたけ

の龍王なり、

りようわう

凡俗なる狐狸の

ほんぞく こり

ともがら
輩

を友と

とも

せむや、

まづ召寄

めしよ

せて見参

げんざん

に入れむ

と、
二振三振尾

を掉れば響宛然金鈴のごとし、之を合圖に

北方より忽然として白毛朱面の大狒飛來

り、西方よりは牛かと思紛ふばかりの狼

躍出でて、一齊に太郎が前に額け

ば、苦桃岩角に腰打懸け、鳩の羽

扇にて麾ねき、實に頼もしき器

量骨格、狒は猿の首領にして狼

は犬の強敵たり、之に加ふるに

毒龍あれば、桃太郎を一戦に

撃破らむ事、鐵槌を以て



輩も知て足手
 纏ふれと御身が信
 方の大將ともあすべき器

拳に千羊の皮
 そ、狐腋
 如うずの本
 文あまトハ
 あり



その者を召寄せた
 まへといふ思多き
 甲かよし候へども類
 ち友を以て聚まる
 の喰甘不貞とい
 へども魔下候

龍王あり
 凡俗ふる狐狸は

を友
 せむや
 まつ召寄
 せて見参
 一入れむ
 二振三振元

かはらけ
土器を摧くがごとし、いぎ

ひきでものと
引出物取らせむと、また二

つどくろ
箇の髑髏を與へ、いでや出陣と立上れば、毒龍再び策

けん
を献じていはく、某に飛行自在の術の候、瞬時にして

につほんこく
日本國に到るべしと、虚空に向つて呼吸を吐けば、

ふしぎ
不思議や黄雲遽然蒸して眼前に聚りぬ、主從之に打

のちゆうと
乗り、宙を飛ぶこと西遊記の繪のごとく、一晝夜にして

がんがいはて
眼界果しなき大洋の上にご來りける、

にがもくたらふしん
苦桃太郎不審を起し、我等神通力を以てかく飛行しながら

いまにつほん
ら、未だ日本の地に着かざる理なし、毒龍爰は鬼个島

を去ること若干里ぞ、さん候、大約十二万三千四百五十六億七



北より忽然として白毛朱面の大神飛來
 り西方よりく牛かこ見紛ふてうりは狼
 躍出てて一齊に太郎が前を鎖け
 て岩桃岩角に腰打懸け物に羽
 屑よて塵ねき實は頼もしく器
 骨格種く狼の首領よして現
 したの強敵より之は加ふる
 毒龍あまて桃太郎を一戦
 撃破らむ事鐵槌を以て

上器を推くうごとし、いさ
 引出物取らむとまて二

筒比彌機を面へいてや出陣と立上りて毒龍再び策
 を献ていていく其は飛行自在の術の候際時よして
 日本國に到るへいと虚空に向つて呼吸を吐けて
 不思議や黄雲遽然蒸りて眼前に聚りぬ主従之よ相
 乗り宙を飛ぶこと西遊記の繪のごとく一晝夜よして
 眼界果しかき大洋のトよを來りける



苦桃太郎不亦を起し我等神通力を以てうく飛行一かか
 ら未だ日本の地よ看らざる理かき毒龍爰て思ふ島

千八

百九十里、おつと其それ

は行過ぎたり、

戻せくと逆飛雲ぎやくひうんの法はふを行なはせて、無二むに無三むさんに退るほどに還かへるほどに、また戻過もどりすぐること九十八万七千六百五

十四億三万二千と一百

里、これではならぬと

また出直でなほして、行けば行過ゆきすぎ、戻れば戻過もどりすぎ、行つ戻りつ、戻りつ行きつ、

ひだりかけ みきはし
左へ翔り右へ走り、四面八角縦横無盡に飛

まは 廻るほどに、流石の毒龍の魔力も限あれ

しだい ば次第に疲れ、雲は弱りて薄れ行き、今は

ふるわた 古綿のごとく此處も寸断れ彼所も寸断

ほけ 来て、放下たる空隙より踐外して、狒狼は

あへ 敢なくも泡立海に落入りて、鰐魚の餌食

となりけらし。

にがもくたらうれ み 苦桃太郎之を見るより奮然として怒を

な 爲し、おのれ毒龍、爾が魯鈍の故を以て、股肱の臣を喪ひ

ぐんぢん たるぞ、軍陣の門出に前

さきわる 徴悪し、憎くき奴

と拳こぶしを固かためて、

毒どくり龍りようの眞額まつかぶ

砕くだけよと乱つゞけ

打うちに撃うちければ

もとより暴氣あらしき

の毒どくり龍りようは發憤いかりの

眼まなこに朱しゆを濺そき、金きん

の鱗うろこを逆さかてたるは木葉このは

に風かぜの吹ふくごとし、

やあ小憎こにくきおのれが大將たいしやう面づら、

いで龍りやう王わうが本て事なみを見みよと、十間じっけん

を去ること若十里を、候大約十二万二千四百五十六億七十八

百九十里、たつと其

し行過ささり

灰せくと逆飛雲日法

を行ふてせて無

無二も退るほどと還るかとし

まさ戻過ぐること九十八万七千六百五

十四億三方二千と一自

里、これてくらふみ

ま、出直して行けて行過



さ戻れて戻過き行つ戻りつ戻りつ行きつ

左へ翔り右へ走り四面へ角縦横無盡に飛

廻るかとし流石は龍龍の體力も限あふ

を次第に散ま雲も物りこ薄れ行き今

古綿はごとく此處も寸斷れ彼所も寸斷

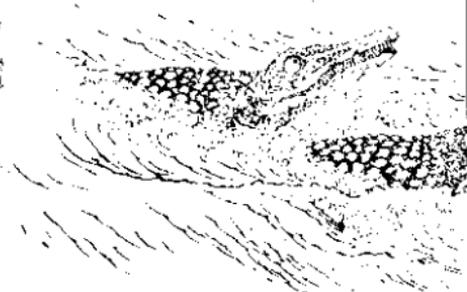
れて致下さる空隙より踐外して拂狼こ

散あくも池直海は落入りて鰐魚は餌食

とありけらく

苦概太郎之を見るより奮然として怒を

爲すかのれ亦龍鬪り魯鈍の故を以て股肱の臣を殺し



あま 餘りの尾を風車のごとくに舞ま

はして、苦桃太郎を七卷に巻まき裹くるめ、骨ほねも微み

塵ちんと固しめつ緊つくれば、物々ものくしやと苦桃太郎、惣そう身み

にうんと力ちからを籠こむれば、さしもの毒どく

りよみつと斷きれ、四段よだんとなつ

て仆たふるれば、魔力まり忽ちち

と解とけて雲くもは吹消ふきけすご

とくなくなれば、

何なにかは以もつて堪たまるべ

き、苦桃太郎にがも、たらはる迢たう

々々《か》の虚空こくうより

こゝを軍陣此門出よ前

激怒し争ひさ

と拳を固め

是龍の首額

砕けよこ見

打撃けれ

もこより暴

の毒龍は逆頂の

眼よ朱を賤き命

此鱗を逆くさるる木葉

よ風は吹ここ

やあ小憎きたれが大将面

いて龍王ヶ小中を見よと上聞

餘り此尾を風中のごとくよ群

ろしく甚桃太郎を七巻よ巻裏め骨も徹

鹿と固緊くまを物々しやと甚桃太郎物身

ふうんと刀を龍むきでさしものよ

龍形つと断れ四段とあつ

て信るまを魔刀忽ち

削けて去て吹消すこ



あしぼ うしな
足場を失ひ、小石の

まいちもんじ
ごとく眞一文字に

まひさが
舞下りて、漫々たる
だいかい
大海へぼかん！

とくかくあれた

何うを以て堪るべ

き苦桃太田道

々の虚空より

足場を失ひ小舟は
ことく真一文字よ

舞下りて漫々たる大海へほうんり

左

藤もふは

三



青空文庫情報

底本：「名著複刻 日本児童文学館 第一集」ほるぷ出版

1976（昭和51）年5月発行

底本の親本：「鬼桃太郎」幼年文学叢書、博文館

1891（明治24）年10月11日印刷出版

初出：「鬼桃太郎」幼年文学叢書、博文館

1891（明治24）年10月11日印刷出版

※表題は底本では、「鬼桃太郎《おにも、たらう》」となつています。

※変体仮名は、通常の仮名にあらためました。

※挿絵は底本に収録されている富岡（藻齋）永洗（1864（元治元）年～1905（明治38）年）のものを使用しました。

※「苦桃太郎」に対するルビの「にかもゝたらう」と「にかもゝたらう」、「阿修羅河」に対するルビの「あしゆらかは」と「あしゆらがは」、「爾」に対するルビの「なんぢ」と「なんぢ」、「武勇」に対するルビの「ぶゆう」と「ふゆう」の混在は、それぞれ底本通りです。

※改行及びルビが単語単位ではなく分割されているのは、底本通りです。

入力：田中哲郎

校正：みきた

2018年12月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鬼桃太郎

尾崎紅葉

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>